第Ⅰ部

「町家建築の再生・活用研究１」

「町並み景観形成に向けたデザイン・コードの作成研究１」

「景観重要建造物指定のための実測調査 5」

藤川研究室

1 章　市街地の歴史的景観調査の概要

1-1　趣旨

本書第Ⅰ部は、2023 年度に石岡市より筑波大学が受託した一般受託研究「石岡市歴史的及び里山景観調査研究」(課題番号 ACI05009)のうち、①町家建築の再生・活用研究１、②町並み景観形成に向けたデザイン・コードの作成研究１、③景観重要建造物指定のための歴史的建造物実測調査の成果報告であり、2015～2022 年度の成果の延長上に位置付けられるものである。

2015年度には、昭和 4 年の大火以降に主として旧水戸街道(中町通り)及び駅前の八間通りに建てられた「看板建築」の様式を持つ店舗付住宅を対象に、中町通りでの連続立面図の作成、旧吉田クツ店・旧近清書店の実測調査を行うことで、 石岡の看板建築の特徴を解明するとともに、全国の看板建築の事例調査を実施して比較し、また看板建築を修理・活用するのに有効な住民参加型まちづくりファンドについての調査をおこなった。そしてこれらを踏まえ、今後の石岡のまちづくりの提案を行った。

2016年度には、中町通りを含む旧市街地（中心市街地活性化事業対象地区）全体の歴史的建造物（昭和25年以前築）の悉皆調査、大火後に復興した代表的町並の調査、まちづくりファンド創設のための調査、戸田邸の建築実測調査を実施した。そして翌年度に向けての提言を述べた。

2017年度には、2017年7月16日（日）に石岡市民会館で開催した「全国看板建築サミット」の開催支援（企画補助、シンポジウムのコーディネート、ロビーでのパネル展示等）を行ったほか、歴史まちづくりの事例調査を石川県小松市・金沢市、福井県高岡市で実施するとともに、4件の歴史的建造物（中村ラジオ店、水酉酒店、中藤米店、前忠商店）の実測調査を実施した。そして、石岡市市街地での歴史まちづくりに関する提言を行った。

ここまでは石岡市の旧市街地に関する研究が中心であったが、2018年度には、旧市街地で氏江きみ邸及び旧横瀬医院の建築の実測調査を行うとともに、筑波大学が石岡市より無償貸与をうけた大字小屋・上山集落の茅葺き古民家について、環境整備・集落におけるヒアリング調査、実測調査・改修案の作成、上山集落住民への説明、市内に現存する茅葺き古民家の悉皆調査、また2019年度に実施する茅葺き作業のための茅刈り作業とその保管を行った。

2019年度には、農村部の茅葺き保全システムについて考察するため、茅葺きの街並み・集落が保存されている例として、三ヶ所の重伝建地区（福島県大内宿・前沢集落、京都府美山町）及び重伝建地区ではない神戸市を取り上げて現地調査を行った。これらを参考に、小屋の古民家の修復データを活用しつつ、石岡市での保全システムについて検討を加えた。

2020年度には、景観重要建造物指定のための歴史的建造物実測調査を、①土屋浩一邸、②石岡富国社、③冷水酒造、④鴻巣邸長屋門、を対象に行い、それぞれの建築史的評価を実施した。①～③は石岡の旧市街地の内部に建つ建物だが、④は旧八郷町の農村部に残された建物である。この結果、いずれも建造物としての価値が高いことが判明した。一方で、③については、その価値の高さにも関わらず、有効に活用されていない現実も明らかとなった。

2021年度には、前年度の調査で建築的価値の高さが判明した冷水酒造の離れ及び土蔵2棟を対象に、酒蔵建築の再生・活用のための研究を実施するとともに、景観重要建造物指定のための歴史的建造物実測調査として柿岡の平家住宅を対象に行い、建築史的評価を実施した。

2022年度には、前年度の作業で残った冷水酒造の土蔵2棟を対象に、酒蔵建築の再生・活用のための研究を実施するとともに、かつての屋敷内の建築物構成の機能的な意味の検討を行った。また、景観重要建造物指定のための歴史的建造物実測調査として真家の新田穂高家住宅を対象に行い、建築史的評価を実施した。

2023年度には、「町家建築の再生・活用研究１」として、細谷忠兵衛（忠之）邸・青柳家土蔵群・石岡印刷に対して実測調査を行い、このうち細谷忠兵衛邸・青柳家土蔵群の再生計画を作成した。また、「町並み景観形成に向けたデザイン・コードの作成研究１」として、旧水戸街道（国道355号）及び御幸通り（八間道路）の3Dスキャンを実施し、これにもとづき通り沿いのファサードについてのデザイン・コード案を作成した。さらに、「景観重要建造物指定のための実測調査5」として谷中邸長屋門（北根本526）の実測調査を行った。

石岡市の旧市街地は、古代の国府以来の長い歴史が積層した重厚な都市空間を持っている。また、周辺の農村部も今でも魅力的な景観と貴重な茅葺き古民家を残している。2015年度からの9ヶ年度にわたる調査・研究を行って来たが未だその魅力の一端しか明らかにしていないであろう。さらに研究を深化させることで、より実効性のあるまちづくり・むらづくりの提案が可能となるものと思われる。今後もそのような作業を続けて行きたい。（藤川昌樹）

1-2　参加者

今年度の調査への参加者は表 1-2-1 の通りである。

表 1-2-1　参加者一覧

教員			
藤川　昌樹　教授			
学生			
楊　佳楽（D2）	劉　菲（D2）	艾　思思（D1）	黄　馨瑶（M1）
劉　嘉恵（M1）	飛松　涼太（M1）	廣谷　泰斗（M1）	孫　潤隆（M1）
馬　源（M1）	許　婧儀（M1）	岡原　玄八（M1）	胡　心月（M1）
李　誼暄（M1）	秦　一丹（M1）	渡辺　莉緒（M1）	原田　貴史（M1）

1-3　スケジュール

今年度の主要な調査等は表 1-3-1 の通りであった。

表 1-3-1　主なスケジュール一覧

日程	内容
2023 年	
5 月 28 日(土)	石岡市街地巡検

9 月 27 日(水)	民家実測練習（於八郷茅葺き研究拠点）
10 月 3 日（火）	3D スキャナ練習（学内）
8 日(日)	細谷忠兵衛邸実測調査
11 月 3 日(金)	谷中邸長屋門　〃
4 日(土)	青柳家土蔵群　〃
24 日(金)	町並み 3D スキャン調査
28 日(火)	石岡印刷実測調査
12 月 5 日（火）	打合せ（学内）
19 日(火)	茅刈り WS（やさと茅葺き屋根保存会主催）
2024 年	
1 月 20 日(土)	亀戸・浦安デザインコード事例調査
20 日（土）・21 日（日）	川越市・小川町町家再生
2 月　7 日(水)	葛飾柴又デザインコード
3 月　4 日（木）	中間発表（筑波大学内部）
13 日（水）	真鶴デザインコード事例調査
22 日（金）	景観調査委員会での報告

2 章　町家建築の再生・活用研究 1

2021・2022 年度の 2 年度にわたり、冷水酒造を事例として、酒蔵建築の再生に向けた研究を実施した。その後、冷水酒造では、敷地内の南辺に建つ土蔵を利用してクラフトサケの製作・販売を行うことになり一定の成果が得られたため、2023 年度はその他の一般的な町家建築を事例とした実測調査とその再生計画の作成を行うこととした。なお、このような再生計画は本来、個別・場当たり的に考えるのではなく、市街地景観の整備の方向性などと連動させるのが望ましい。したがって、第 3 章で述べるように、並行して町並み景観の整備をはかるべくデザイン・コードの作成も課題とした。

実測調査の対象としたのは、細谷忠兵衛邸、青柳家土蔵群、石岡印刷であり、このうち前二者については再生計画も作成した。

2-1　細谷忠兵衛（忠之）邸

2-1-1　調査概要

調査は次の要領で行った。

・日　程：2023 年 10 月 8 日（日）
・調査員：藤川昌樹、楊佳楽、艾思思、黄馨瑶、劉嘉恵、馬源、孫潤隆、許婧儀、岡原玄八、渡辺莉緒
・調査内容：配置図・平面図の作成、写真撮影、所見の作成

2-1-2　調査所見

南北に通る国道 355 号に東面する町家である。年代を直接示す史料は得られなかったが、昭和 4 年(1929)3 月 14 日の大火後に建築したとの伝承がある。元は菜種油・大豆油などの植物油を扱う油屋を営み、ライジング石油の代理店もつとめていたという。建物は基本的に伝統的な町家の構成を取っているが、南北の妻壁は大谷石を積んだ防火を意識したものであるので、当家の商売と関係があるのかもしれない。なお、現在の店舗はその後和菓子屋を営んだ時代に改造を加えたものである。

1 階は、間口 4 間・奥行き 9 間の規模で、ミセ・チャノマ・ナカノマ・オクノマの 4 室が並んでいたといい、通り庭が建物を貫いている。しかし、ミセ・チャノマは改造が大きく、原型を留めない。オクノマは床と天袋・地袋、平書院を備える本格的なものであり、ナカノマと続き間を構成する。なお、通り庭にはトロッコのレールが残る。

看板で隠れているが 1 階前面の半間分は下屋であり、2 階は正面から半間後退した位置に載り、間口 4 間・奥行き 2 間半の規模で、中には 6 畳 2 室の続き間が収められている。2 室の西側（奥側）には縁側が配され、部屋境には欄間もはめ込まれている。主室は南側の室であり、ここに床の間が設けられ、正面側の長押は床の間の奥まで続いている。この座敷は和菓子屋を営んでいた時代には客の接待に用いられたという。

2 階部分の屋根は切妻・平入りで金属板葺きであり、1 階のナカノマ・オクノマ上部は桟瓦葺で棟の向きが 2 階部分とは直角をなしており、通り（東）側が切妻、奥（西）側は寄棟となっている。チャノマ上部は一段低いトタン葺である。

主屋の奥には、2 棟の大谷石の蔵が建てられている。主屋のすぐ後の蔵は、梁間 2 間・桁行 5 間で 2 階建ての規模を有する。内部の壁及び 1 階の天井は漆喰塗りで、柱は用いられていない。　屋根裏には、

天長地久　大正拾五年五月八日建設

大工棟梁　島田豊吉
当主　細谷ひさ　石工仝　　田中辰之助
鳶職仝　　川﨑新吉

と書かれた棟札があり、現当主の曾祖母にあたる細谷ひさ氏により、大正 15 年(1926)5 月に上棟されたことが分かる。この石蔵は、昭和 4 年の大火では焼け残ったことになる。

一方、その奥の石蔵も、規模は梁間 2 間・桁行 5 間の 2 階建てで小屋を支える柱がないのは同じだが、2 階の床を支える柱は 1 間ごとに建てられている。内壁と 1 階天井はモルタル塗りである。こちらにも、

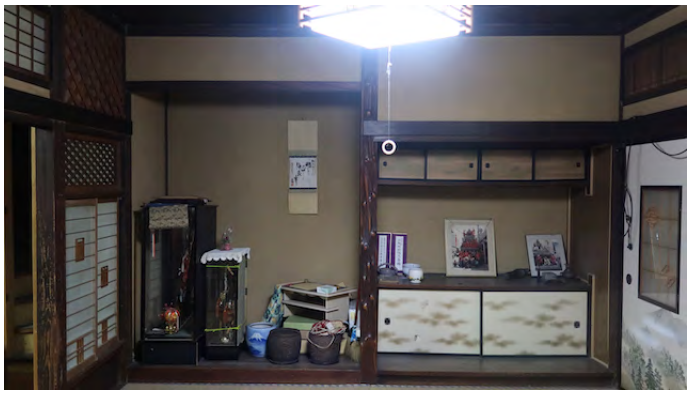
大工棟梁　島田豊吉
天長地久　昭和四年四月廿二日建設　当主　細谷ひさ　石工棟梁　金原金三
鳶　　職　川﨑新吉

と棟木に墨書で記されており、同じ当主により昭和 4 年の大火後、1 ヶ月後には上棟されていたことが判明する。

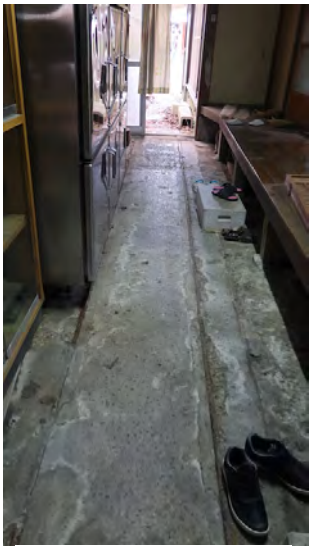
なお、建設年や手がけた左官など詳細は不明だが、敷地内にはモルタルで塗り込められた屋敷神も残されている。

▲主屋（店舗）正面外観

▲ミセ内部



▲オク内部

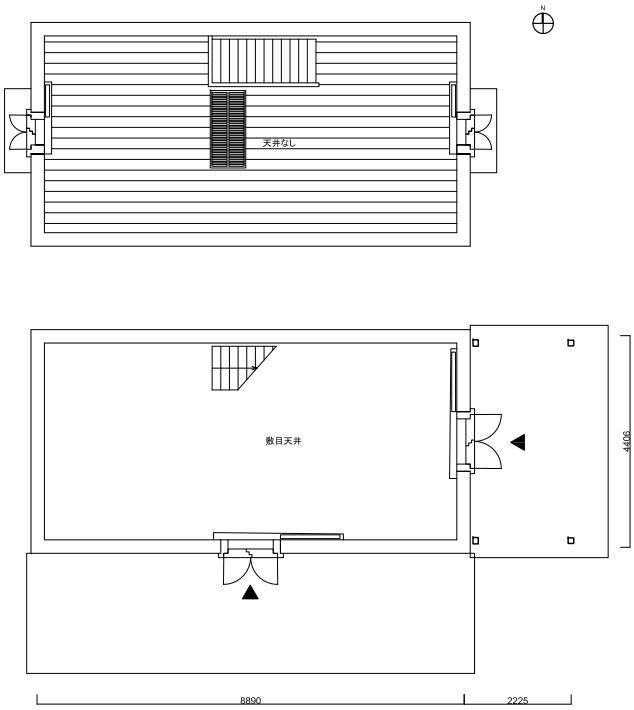


▲通り庭のレール

▲モルタル造の屋敷神

▲土蔵１外観

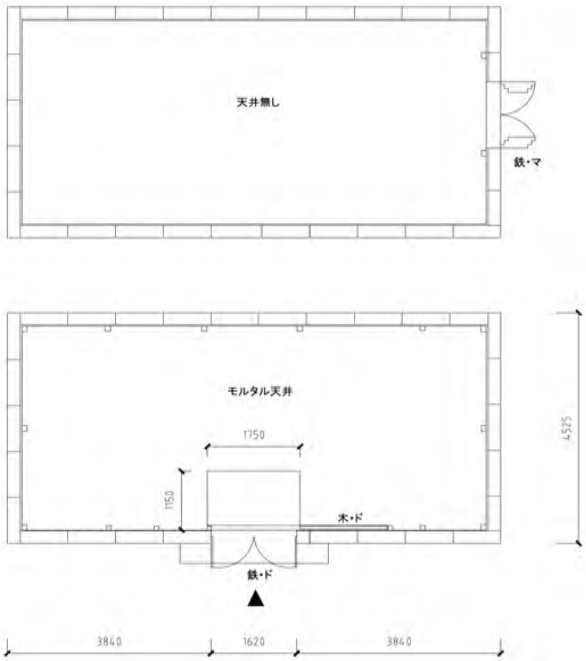
▲土蔵１墨書



▲土蔵１平面図

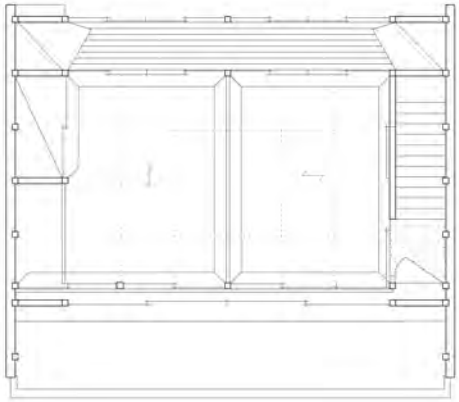
▲土蔵２外観

▲土蔵２墨書

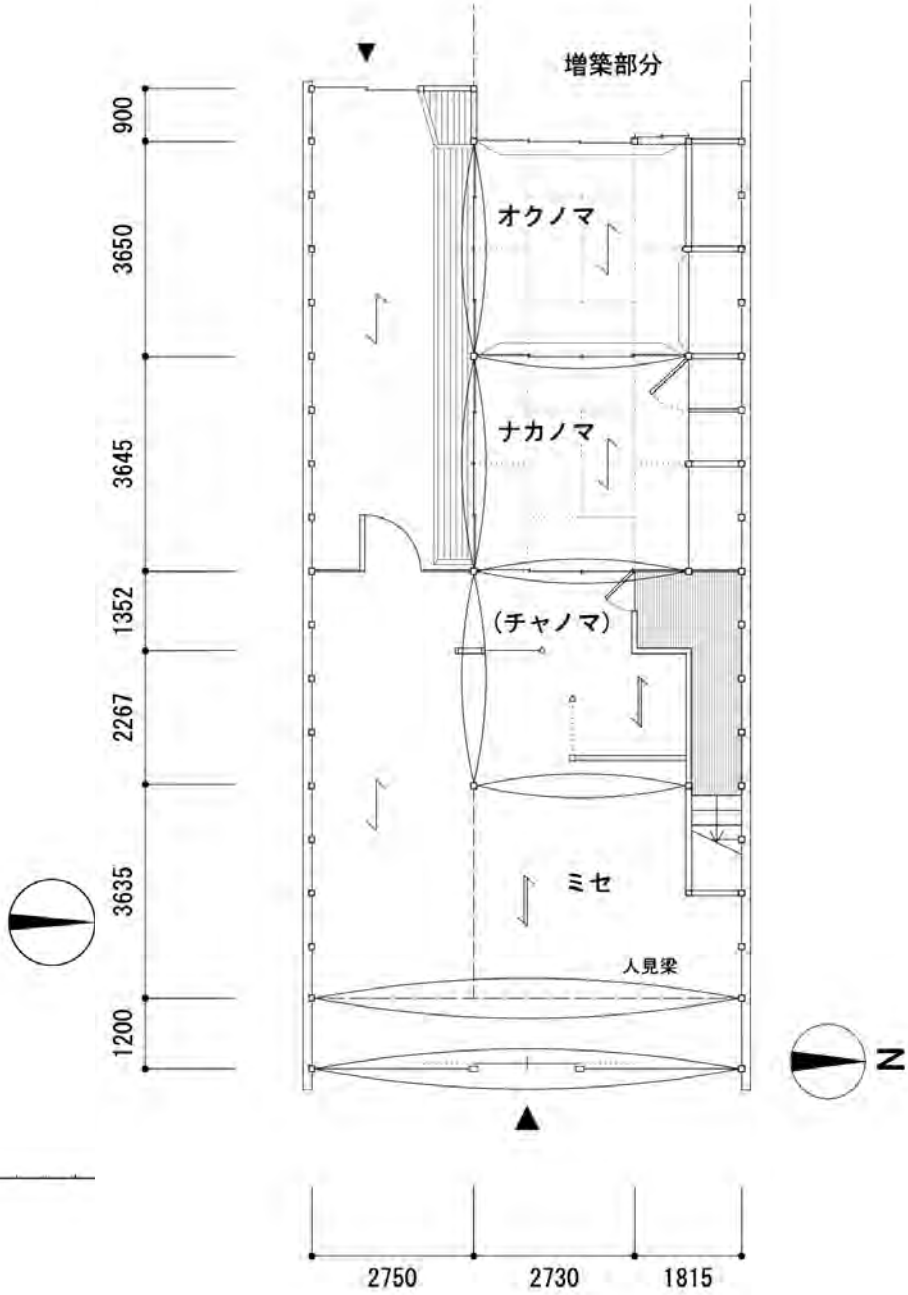


▲土蔵２平面図

▲配置図



▲主屋２階平面図



▲主屋１階平面図

2-1-3　再生計画の概要

再生計画の提案は、調査に参加した大学院生達が主体となって作成した。

細谷邸については、石岡市の人口減に対応する施設として、移住支援センター兼ゲストハウス（「蔵泊」）としての利用が提案されている。

提案に向け、参考事例として埼玉県の小川町・川越市を調査した。小川町は最新 2024 年の住みたい町ランキングで首都圏 3 位にランクインしており、昨年の移住相談の件数も同県内 2 位となっている。このように話題となった要因の 1 つに町が移住支援に力を入れていることがある。小川町観光移住センター「むすびめ」は令和 3 年にオープンした、昭和初期の料亭をリフォームした建物である。観光案内所も兼ねているため気軽に入りやすい点が優れている。

二つ目は蔵造りの街並みで著名な埼玉県川越市の三久保町にあるカフェー兼ゲストハウスである。もともと築約 100 年の古民家で、肥料問屋兼住居として建設されたが、近年は空家になり、10 年近くは使われていなかったという。しかし、現在ではラウンジも設置され、町のイベント会場としても活用されている。

細谷邸の再生計画では、主屋の土間部分にロビーと軽食を取れるカフェ、レンタサイクルのポートを設置し、一階の和室 2 室は、レンタルスペースやギャラリー、2 階は移住支援の場として利用する計画となっている。増築部分は比較的新しいが、高密度でもとの奥座敷の居住環境を悪化させているので解体して広い庭を作り、屋外 WS などを行えるように計画した。通り庭のトロッコの跡が近くまで来ているので「レールの庭」とした。2 棟の蔵は施設の最も奥にあり、落ち着いた空間であるため、ゲストハウスや長期での店舗への貸し出しを行うような提案が行われている。2 棟の蔵の間には屋敷神があるため、バーベキューなどを行う「ほこらの庭」として整備する提案となっている。

2-2　青柳邸倉庫群

2-2-1　調査概要

調査は次の要領で行った。

・日　程：2023 年 11 月 4 日（土）
・調査員：藤川昌樹、艾思思、劉嘉恵、馬源、孫潤隆、許婧儀、岡原玄八、秦一丹
・調査内容：配置図・平面図・断面図の作成、写真撮影、所見の作成

2-2-2　調査所見

この倉庫群は青柳家の居宅と旧笠間街道をはさんだ向かい側（東側）の敷地に建つものである。敷地の東側でも南北道（昭和初期に新たな笠間街道となった（現国道 355 号））に接するので、東西二面からアプローチすることができる。敷地内には、旧笠間街道側に西面してたつ店蔵、南西角にたつ門、その東の土蔵、敷地北側に寄せて建てられた石蔵、国道側から敷地内に入るための門からなる。さらに以前は土蔵と石蔵の間に新店として洋館が建てられたという。現在では洋館の建物自体は取り壊されているが、石蔵の壁には洋館側から利用した金庫が埋め込まれているし、国道側の門の脇には暖炉も遺されている。

店蔵は土蔵造りの 2 階建てで、桁行 5 間半・梁間 3 間の規模を有し、前面に 1 間の下屋庇がとりつく。屋根は切妻・桟瓦葺きであり、建物の概形は通常の町家と共通する。ただし、北側の妻壁と正面の腰壁を

煉瓦造とすること、正面の北側半部を壁としていることなどは、通常の町家と異なる点である。一階は全面が土間であり、北側 2 間半が吹き抜けとなり、南側 3 間の部分に 2 階が載る。柱は半間ごとにたてられ、吹き抜け部では各柱間に 2 本ずつ荷摺木が打ち付けられている。正面中央には凝灰岩系の石（秋保石との伝承がある）を積んで作った戸袋が設けられている。2 階へは当初東南隅部に設けられた階段を用いて上っていたが、現在では階段は取り外されている。2 階は板敷であり、天井は張られていない。

地棟には、

仕事師　関秋次郎　　煉瓦師　大野慶助
御大典紀年　大正四年九月建之　大工　高岡長松　　石工　田中安之助
左官　君和田原次郎

との墨書があり、大正 4 年(1915)9 月に上棟され、大工・高岡長松以下、仕事師（鳶）・関秋次郎、左官・君和田原次郎、煉瓦師・大野慶助がそれぞれの職務を担ったことが分かる。

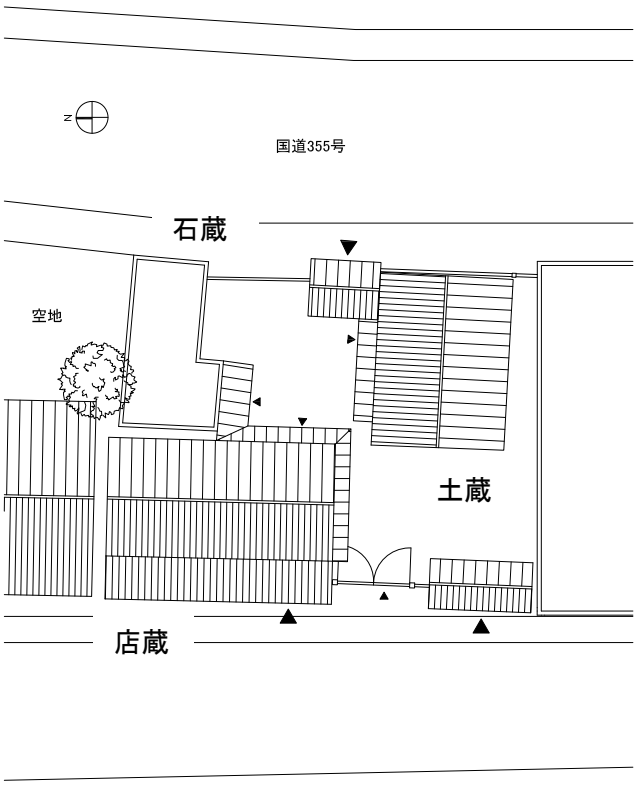
また、敷地の南端にたつ土蔵は、梁間 3 間・桁行 4 間の 1 階建てで切妻・桟瓦葺の屋根を持つ建物である。各柱の中間に荷摺木が建てられている。地棟の南側下方に通る桁には、

明治貳拾五歳十二月吉辰改建　宇前蔵　棟梁桜井萬吉　仕事師　□□次郎
石工　中□辰之介

との墨書があり、明治 25 年(1892)12 月の上棟であることが分かる。

一方、石蔵は、梁間 2 間、桁行 4 間の規模で、西南の入り口廻りで半間強の突出部を持つ。大谷石を積み上げてフラットルーフの屋根を支える構造であり、木柱を用いていない。梁は長方形断面の太いものであるので、RC 造の可能性もあろう。内部には荷摺木が 30cm 程度の間隔で配されている。建設年代は不明であるが、三つの中では最も新しいものと推定される。

建設年代・様式の異なる各種の倉庫が密度高く建ち並んでいる点、旧笠間街道の向かいに位置する青柳家邸と一体となってかつての街路景観を作り出している点で、極めて価値の高い倉庫群であると考えられる。

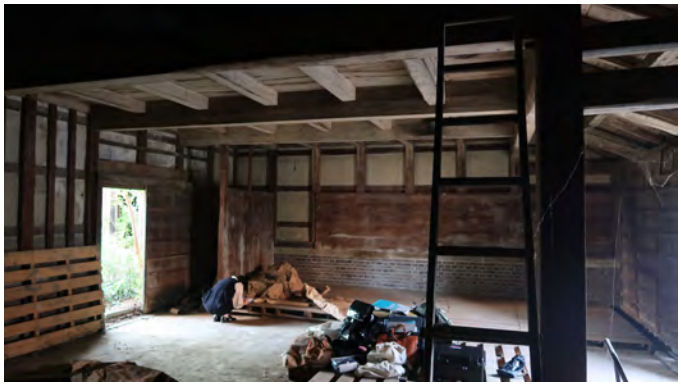


▲配置図

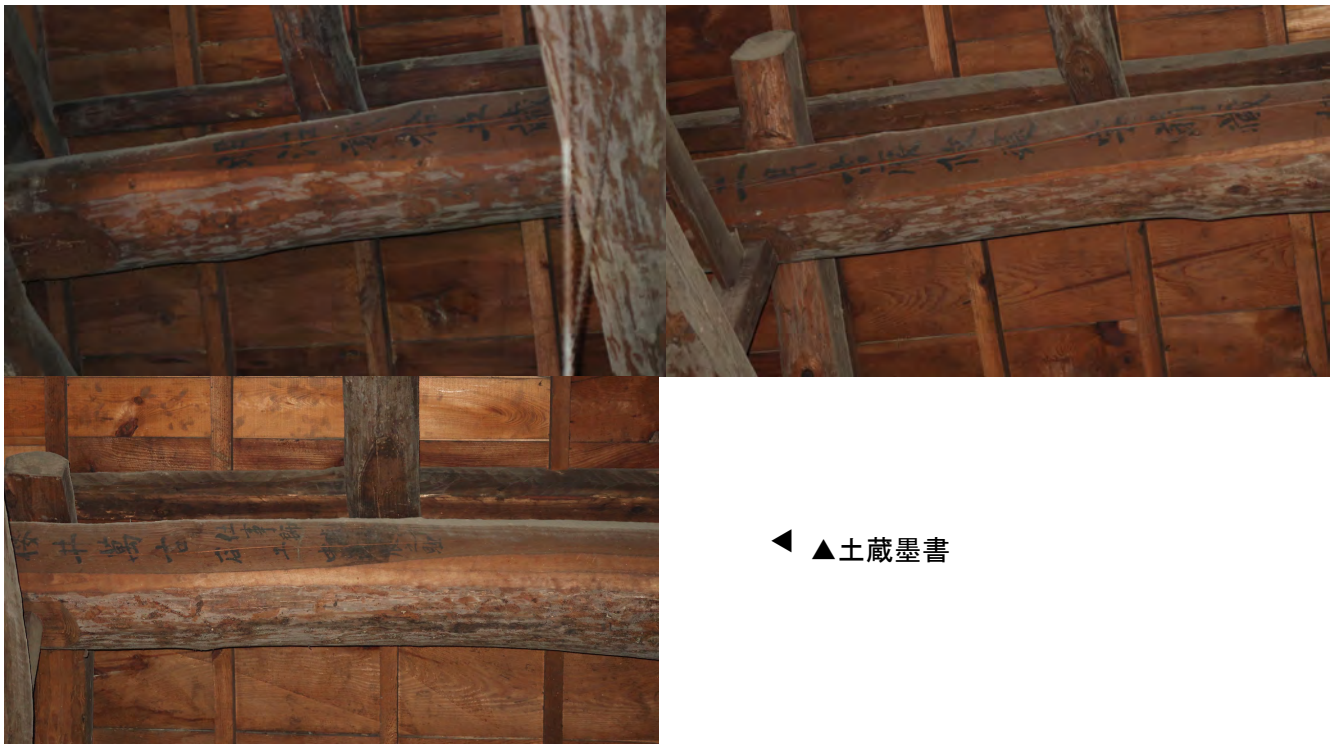
▲国道側外観

▲店蔵外観

▲店蔵墨書

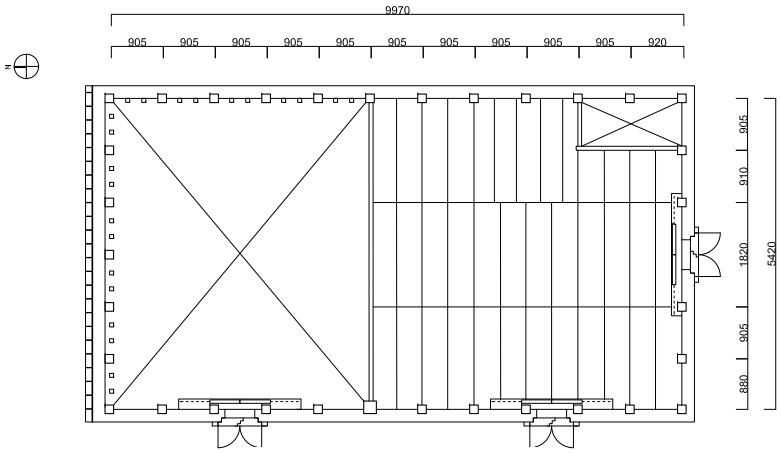


▲店蔵内部

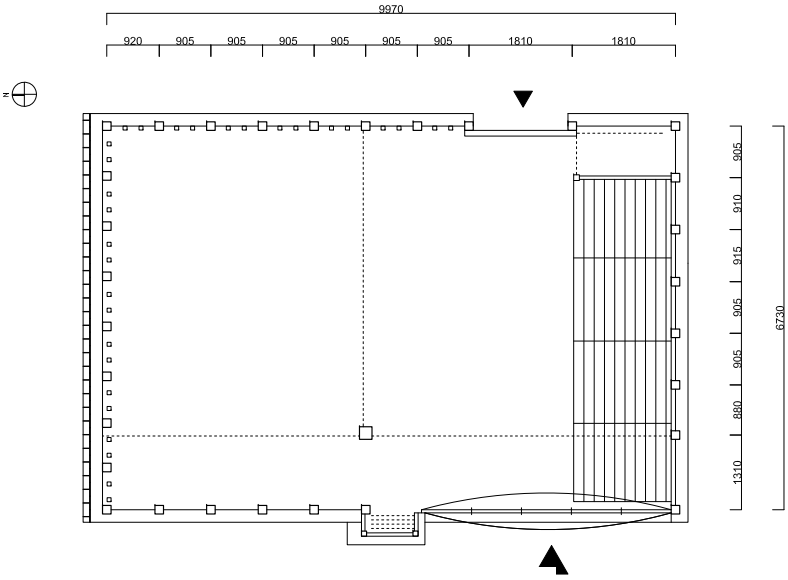


◀ ▲土蔵墨書

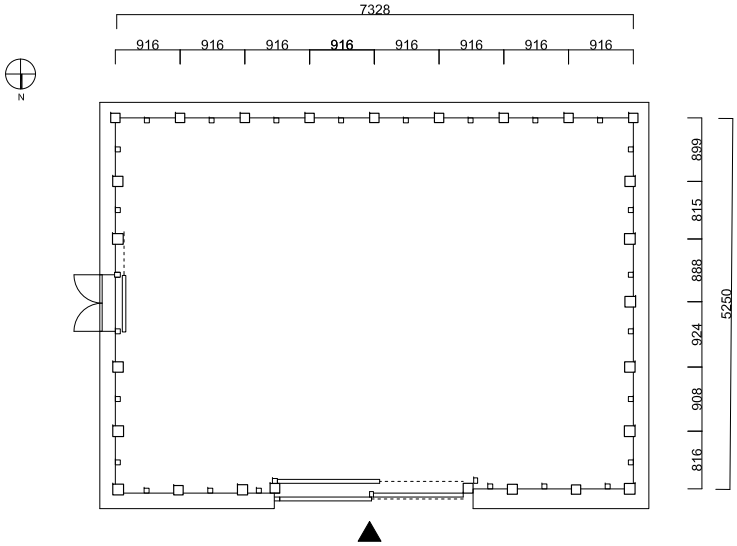
▲洋館の暖炉跡



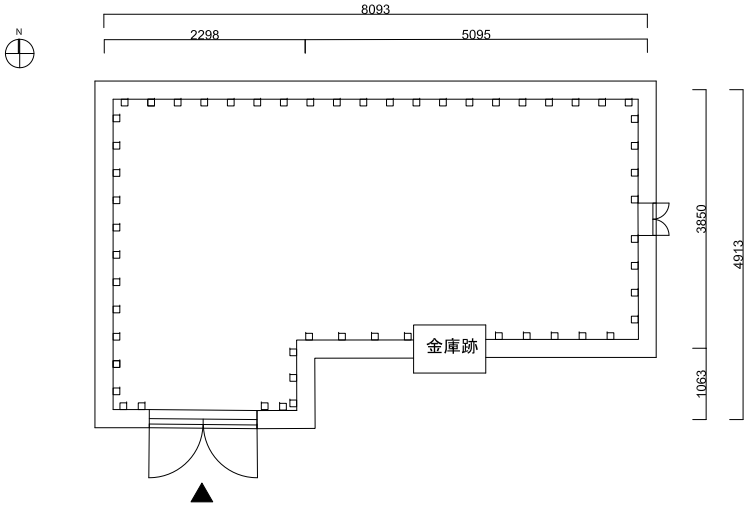
▲店蔵２階平面図



▲店蔵１階平面図



▲土蔵平面図



▲石蔵平面図

▲石蔵内部

2-2-3　再生計画の概要

青柳家倉庫群の再生計画についても、調査に参加した大学院生達が主体となって作成した。

こちらでは、共用の風呂を中心とした計画が提案されている。参考事例として調査したのは埼玉県川越市における小江戸蔵里である。小江戸蔵里は、明治 8 年に創業した旧鏡山酒造の建築物を改修した施設である。市民と観光客との交流、地域の活性化を図るため、平成 22 年に改装された。蔵里の立地は川越市の蔵造りの町並みとして知られる重要伝統的建造物群保存地区の外側にあるが、駅から同地区に向かうルート上に位置している。この施設は明治蔵、大正蔵、昭和蔵、展示蔵という四つの蔵からなり、明治蔵は酒・食品と民芸品の販売、大正蔵はレストラン、昭和蔵は酒の販売を中心に、埼玉県内の日本酒を揃え、有料の試飲ができるように整備されている。展示蔵には、酒蔵の歴史を紹介する展示エリアが設けられ、貸し出しが可能な会議室やギャラリーがあり、地元住民にレンタルすることもできるようになっている。

青柳家倉庫群の再生計画提案では共用の風呂としての機能と、蔵の要素を組み合わせる事で、ユニークな風呂体験ができる施設＝「蔵風呂」として再生することを目指している。施設はそれぞれ、店蔵を食事と酒の提供を行う飲食店として、土蔵を風呂として、石蔵を瞑想スペースとして利用するように構成されている。洋館の跡地のスペースは露天休憩場所に位置付けられ、悪天候時にも施設間を移動できるように屋根をかける計画とされている。

この蔵風呂の提案は、細谷邸の再生案「蔵泊」と連動して利用することで、より効果的になるとの期待も込められている。

2-3　石岡印刷

2-3-1　調査概要

調査は次の要領で行った。

・日　程：2023 年 11 月 28 日（火）
・調査員：藤川昌樹、楊佳楽、孫潤隆、許婧儀、梁祝（筑波大学特別研究学生）
・調査内容：配置図・平面図の作成、写真撮影、所見の作成

2-3-2　調査所見

国道 355 号から石岡駅に向う八間道路（御幸通り）に南面する和洋折衷の看板建築である。敷地の東側には八間道から北に伸びる道路が通る。建築年代を直接示す史料は得られなかったが、聞き取りによると、昭和初期に酒蔵を経営していた柴野善兵衛が「食堂いろは」のための建物として建設したという。八間通りが開通したのが昭和 4 年(1929)10 月であるので、築年代はこれ以降であろう。そして戦後、昭和 20-22 年頃に、現当主（3 代目）の祖父がこの建物を購入し、昭和 2 年に既に長谷清の隣に開店していた印刷店を移動させたとのことであった。

建物は間口 5 間・奥行き 3 間で 2 階建ての店舗棟とその背後（北側）に 2 階建の工場および 2 階建ての居室棟がとりつき、東側に 1 間弱の下屋が増築されている。店舗棟の背後は 50 年ほど前に改築したもので、その前は座敷・勝手などがあったという。

敷地は二面で街路に接しているので、店舗棟の正面（八間道側）と東側の道の二面は全てモルタルで塗

り、西側にもわずかにモルタルの壁を廻している。現在はいずれもアルミのサッシュに取替えられているが、かつては一階の出入り口は木製の回転扉で、1・2 階には上げ下げ窓が用いられていたという。

外壁は、看板建築のように垂直のファサードを持ち洋風を基調とする。しかし、正面入り口の上部に起り屋根の破風が付く点、店舗棟の上にかかる入母屋屋根が外壁よりも高く外から望見できる点が、和風の建築のようでもあり、通常の看板建築とは異なる。

店舗棟の 1 階のうち正面入り口から続く部分は 3 間四方の広がりを持つ旧食堂の部分で、天井・壁・床のいずれも当初の板張りが残されている。今では印刷関係の各種資財等が置かれている。壁は板を縦に張ったもの、床は転ばし根太を用いた低い床である。階段を挟んで西側に位置する室は事務所として使われており、改造が著しい。2 階へは、現在では正面入り口から入ってやや左に設けられている階段があるだけだが、かつては東側妻壁沿いにも設けられていたことが痕跡より判明した。

2 階の食堂上部は、10 畳敷の 2 室が南北に並び、境界にかつては建具が入れられていた。現在は作業場として用いられているが、食堂として使用されていた時期にはここにも客が通されていたのであろう。壁・天井は 1 階と同様の板張りである。東端の半間は押入・物入となっているが、北側の 1 間半の部分はもとは 1 階からの階段であり、サービス用として使われていたと推測される。一方、事務所上部は居室として使用されている。

昭和 4 年の石岡大火の前に建築された和洋折衷の看板建築として、貴重な事例であると考えられる。

▲正面外観

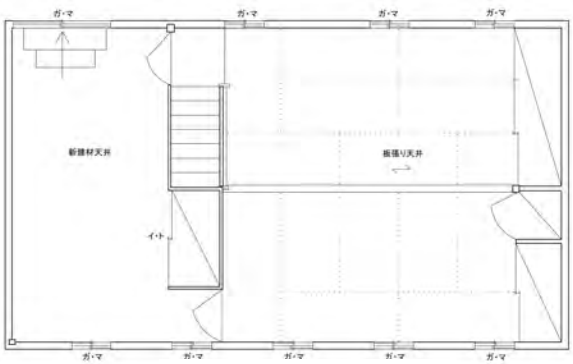
▲西南外観

▲東南外観

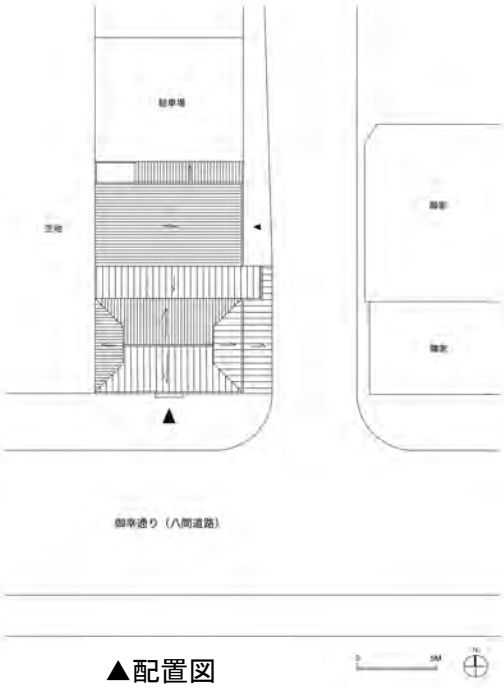
▲東側当初妻壁内側に残る階段の痕跡

▲東側当初妻側の外側

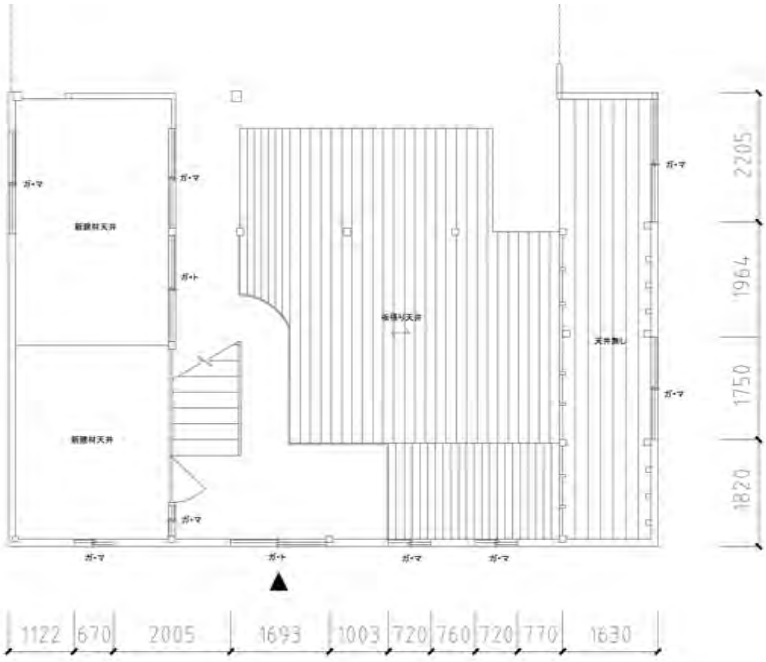
▲２階への階段



▲２階平面図



▲配置図



▲１階平面図

３章　町並み景観形成に向けたデザイン・コードの作成研究１

3-1　デザインコードとは？

デザインコードとは景観構成要素の在り方、およびその組み合わせについての視覚的なルールを意味する。もう少し具体的にいうと、建物などの配置や色、素材などに関して町並みの関係者達が共通して守るべきルールである。なぜ石岡市でデザインコードを検討する必要があるかというと、中高層マンションが乱立したり、派手な色彩の建物が出現したりしないように、またより積極的に統一感のある美しい街並みを作り出す必要があるからである。現在歴史的な景観を活かした街づくりが成功している川越でも、かつては同様の問題が生じていた。また、石岡市では街づくりファンドを設定しているが、現在のところその多くが建物の修繕に使われており新築への適用は行われていない。しかし、街の景観を美しく整えるためには古い建物を残すだけでなく、新しく建物も建設していくことが重要である。したがって、両者を無理なく調和させるようなコードが必要となるのである。

デザインコードにはいくつか種類がある。歴史的デザインコードは見える遺伝子情報として保存されるもので、創造的デザインコードは地域の新建材や新しい技術によって定着したものを指す。たとえば、白や黒の漆喰の壁は古くからの歴史的デザインコードの一つである。見え方からとらえるデザインコードもある。たとえば、通りの一階の軒先の高さを揃える、建物のファサードの形態を揃えることなどが分かりやすい例として挙げられる。

3-2 デザインコードの対象

今年度の研究で対象としたのは中町商店街である。

中町商店街でデザインコードを策定するために、まず現状の調査を行った。国道 355 号と八間通り（御幸通り）において通り沿いの空間の 3D スキャンを行った後（図１・２）、国府三丁目の茨城県信用組合の店舗から久松商店までの幹線道路両側で 3D モデリングを作成した。

この結果、今回調査した範囲には、①12 個所の駐車場があり、4 個所の空き地があること、②通り全体に街路樹はあまりないが、建物の前に一定の広さの歩道が整備されており、街全体の景観と視野の透過性が確保されていること、③通りの色彩はグレーと白を基調としているが、看板建築と一部の他の建物は黄やオレンジや緑などのカラフルな色が使われており、街路景観を明るいものにしていること、などが判明した。

図１　国府三丁目交差点付近

図２　十七屋付近

3-3　参考事例の調査

石岡市のデザインコードに取り入れるため参考事例調査を行った。

一つは、亀戸香取勝運商店街はである。この商店街は、平成 23 年に、「昭和 30 年代」をキーワードにした観光レトロ商店街として、参道の左右に 8 ヶ所の看板建築が「新しく」建設されていた。看板建築は特に香取神社参道の入口に集中しているのが特徴である。特に特徴的な建物は Olympic というスーパーマーケットで、亀戸香取勝運商店街に面する側は渋い看板建築の様式、明治通り側は鮮やかなピンク色に塗られている。店によって完成度にばらつきがあるが、全部の店が袖看板を持っている、住宅 1 階の軒線が繋がり連続感が感じられる、などの工夫が施されていることが判明した。また、建物ごとに全体のデザインは異なるが、小物のデザインを共通させることで、統一感が作られていた。看板や街灯、ベンチなどの街並みの小物が昭和風に作られているため、新しいものでも懐かしさを感じるつくりになっていたのである。

このほか、葛飾区柴又、真鶴市なども調査を行ったが、詳しくは添付資料を参照されたい。

3-4　石岡のデザインコード

以上のプロセスから石岡のデザインコードを提案した。

まず、第一に、全体の規模的統一を図るため、南端東側の 3 軒の国登録文化財の高さ（約 8m）を基準にして、高さを制限することを提案した。石岡においては既に高さ規制が加えられており、石岡修景ガイドラインでは、道側の建物の高さを 10m以下，２階以下と規定されている。この高さ規制をさらに 1m 低い 9m 以下とし、軒下の位置を揃えることも加えるべきであるとした。高さを 9m 以下としたのは、国登録文化財である久松商店と高さを揃えるためであり、建築自体のデザインや色、築年数などは多様であっても、街並みの統一感をさらに高められると考えた。

また、色彩のデザインコードの色彩についても提案を行った。石岡市の中町通り沿いは、既に様々な色の建築物が建ち並んでいる。一般的に歴史的な街並みを形成する地域では、建物の色が無彩色で統一され、有彩色を減らしていく動きが見られる。しかし、石岡の歴史的街並みにおいては、「カラフルさのあるレトロな街並み」という他地域ではあまり見られない特徴があると考えられる。あえて既に存在するカラフルさを残しながら、さらに街に彩りを増やしていくことで、看板建築特有の個性豊かなデザインがより引き立てられると考えられる。具体的には、①現在空き地となっているスペースにカラフルな看板建築を新たに建てる、②地味な色の既存建物について色の塗りかえを行う、の２つが想定される。既にある建築物の色のトーンと歴史性を考慮し、建物に使用する色は、色相と色の明るさは自由にしつつ、色の鮮やかさを HSL で 20 以下に抑えることにすると適当かと考えられる。HSL とは、色相、彩度、輝度を数値で表現する指標であり、彩度は 0-100 の値をとり、数値が高いほど鮮やかな色となる。彩度 20 は全体的に鮮やかさを抑えた渋めの色となる。この色使いによって、カラフルだがレトロな印象を醸し出す街並みを作り出すことができるものと考えられる。看板建築を追加した立面図も作成した。

4 章　景観重要建造物指定のための実測調査 5-谷中邸長屋門

4-1　調査概要（谷中邸長屋門）

調査は次の要領で行った。

・日　程：2023 年 11 月 3 日（金）

・調査員：藤川昌樹、艾思思、劉嘉恵、孫潤隆、胡心月、李誼暄、渡辺莉緒、原田貴史

・調査内容：配置図・平面図の作成、写真撮影、所見の作成

4-2　調査所見

谷中家は江戸時代に名主をつとめ、名字帯刀を許された家である。その屋敷は背後（北側）に舟塚山古墳を背負い、前方（南側）に田園の広がる北根本の列状集落に位置する。屋敷の南側の前面道路に接して建つのがこの長屋門であり、寄棟で茅葺きの屋根を持つ。前面道路の反対側には恋瀬川流域の広大な水田が広がっている。

建設年代を直接示す史料は発見できなかったが、江戸時代末に建てられたとの言い伝えがある。当家が名主を勤めていたということ、西側の室の戸に和釘が用いられていることは、この伝承と矛盾しないので、蓋然性は高いと言えよう。

長屋門は桁行 7 間、梁間 2 間の規模で寄棟・茅葺きの屋根を持つ。桁行方向は 1 間が 1,640mm で 6 尺より約 1 割短い寸法であるが、梁間方向の 1 間の寸法は芯々で 1,812mm と 6 尺に近い。正面側の規模が大きくなりすぎないようにという配慮があったものと推定される。前面・両側面にはせがい・出桁を用いて軒を深く出している。

中央やや西寄りを出入り口とし、2 本の鏡柱の間に大扉を配し、東側には潜り戸も設けている。大扉は表側の下半分を銅貼りとしている。入り口の東西には 1 室ずつがあり、西側は物置として、東側は各種道具や農業用資材を置く部屋として利用されている。いずれも現在では転ばし根太を用いた低い床張りとしている。ただし、西側の室の入り口は現在の床面より高い位置に敷居が設けられているので、以前は束・大引・根太で支えた床がはられていたものと考えられる。また、土台下の基礎石には、大谷石を用いているが新しく、40 年くらい前に交換したとのことである。

小屋は叉首組で真束を併用するものであり、大棟を瓦巻としている。30 年程前に茅が火事で燃えたため葺き替えたが、それ以降は葺き替えていないという。

北根本の田園景観の中に、伝統的な茅葺きの外観をみせる長屋門であり、石岡市の景観を特徴づける建物として貴重な存在である。

▲長屋門正面外観

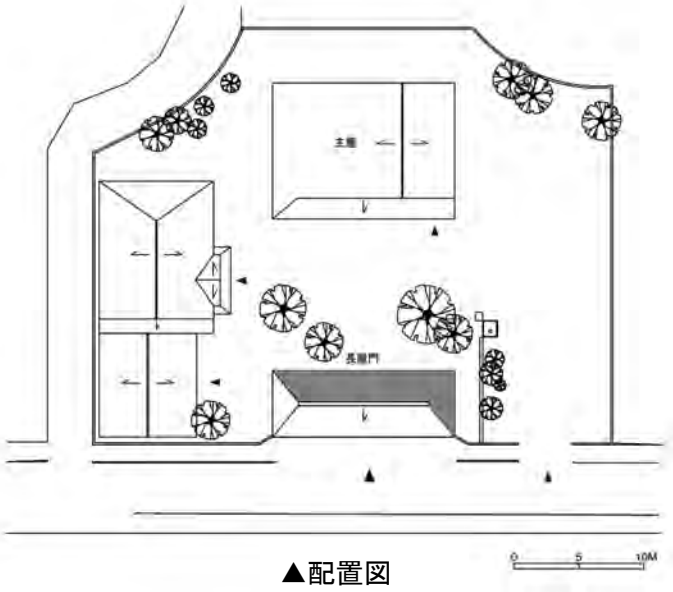
▲長屋門東側側面外観

▲軒裏詳細

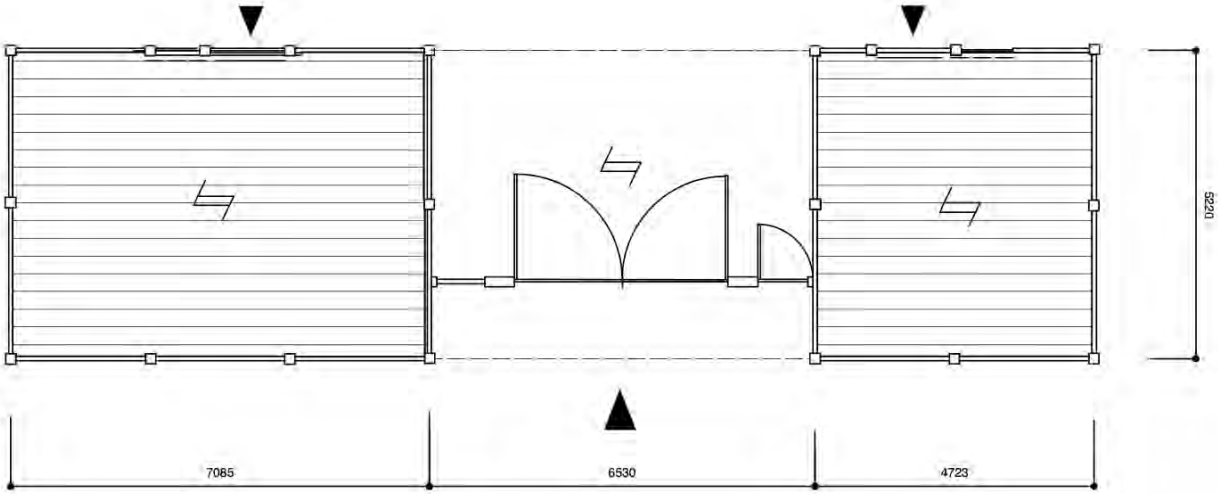
▲小屋裏

▲大扉

▲板戸の和釘



▲配置図



▲長屋門平面図

筑波大学大学院社会工学学位プログラム
歴史的建造物ＷＳ
2024.3.22

「歴史的市街地景観調査研究」結果報告

■ 藤川　昌樹　教授

■ 楊	佳楽	D2	■ 馬	源	M1
■ 劉	菲	〃	■ 許	婧儀	〃
■ 艾	思思	D1	■ 岡原	玄八	〃
■ 黄	馨瑶	M１	■ 胡	心月	〃
■ 劉	嘉恵	〃	■ 李	誼暄	〃
■ 飛松	涼太	〃	■ 秦	一丹	〃
■ 廣谷	泰斗	〃	■ 渡辺	莉緒	〃
■ 孫	潤隆	〃	■ 原田	貴史	〃

調査概要 1

・2015年度　・中町通りの連続立面図作成　・実測調査2軒（吉田クツ店・近清書店）

・2016年度　・旧市街地の歴史的建造物悉皆調査　・実測調査1軒（戸田邸旧主屋）　（＋山本研究室）

・2017年度　・「全国看板建築サミット」支援　・実測調査4軒（中村ラジオ店・水西酒店他）
・歴史まちづくり事例調査（石川・富山県）

・2018年度　・実測調査2軒（氏江きみ邸・旧横瀬医院）・茅葺き古民家悉皆調査
・小屋の古民家整備事業1（環境整備・実測調査・葺き替え用の茅刈り）

・2019年度　・小屋の古民家整備　・茅葺き集落の葺替えシステム調査（福島・京都・兵庫）（＋村上研究室）
・景観重要建造物指定のための実測調査１（保科邸長屋門）

・2020年度　・小屋の古民家整備支援（すす払い・茅葺き体験・茅刈り）
・景観重要建造物指定のための実測調査２（石岡富国社・冷水酒造・土屋浩一邸・鴻巣隆邸長屋門）

・2021年度　・酒蔵建築の再生・活用研究ー冷水酒造の離れ・土蔵を対象にして　→冷水酒造に動き！
・景観重要建造物指定のための実測調査３（柿岡・平佳世子邸）

・2022年度　・酒蔵建築の再生・活用研究２ー冷水酒造の土蔵を対象にして　→　〃　ファンド利用・バー開店へ！
・景観重要建造物指定のための実測調査4（新田邸）

・2023年度　・町家建築の再生・活用研究１ー細谷忠兵衛邸・青柳邸土蔵群・石岡印刷
・町並み景観形成に向けたデザイン・コードの作成研究１
・景観重要建造物指定のための実測調査5（谷中邸長屋門）

調査概要 2

主要日程

2023年

- 5/28　石岡市街地巡検
- 9/27　民家実測練習（於八郷茅葺き研究拠点）
- 10 / 8　細谷忠兵衛邸実測調査
- 11 / 3　谷中邸長屋門　〃
- / 4　青柳邸土蔵群　〃
- / 24　町並み3Dスキャン調査
- /28　石岡印刷実測調査

①実測・スキャン調査

- 12 /19　茅刈りWS

2024年

- 1/20　亀戸・浦安デザインコード事例調査
- /20-21 川越市・小川町町家再生　〃
- 2/ 7　葛飾柴又デザインコード　〃
- 3/ 7　中間発表
- /13　真鶴デザインコード事例調査
- /22　景観調査委員会

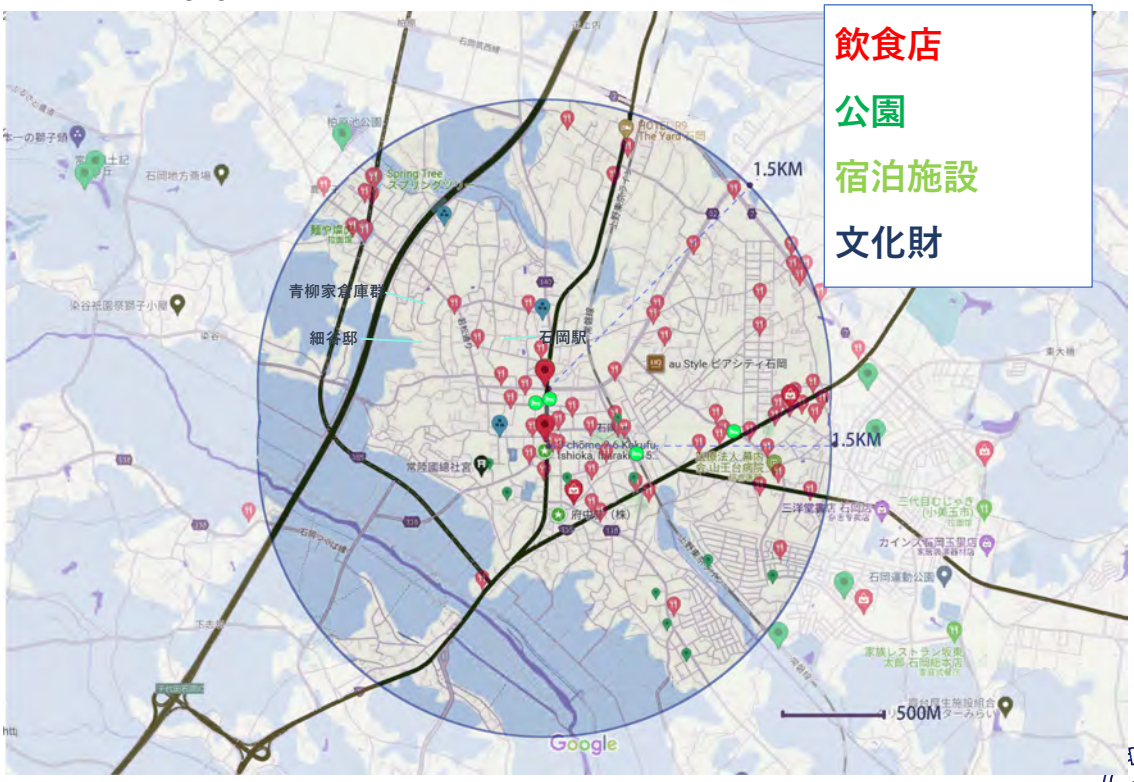
②事例調査

町屋再生班

町屋再生班 立地分析

町屋再生班 立地分析

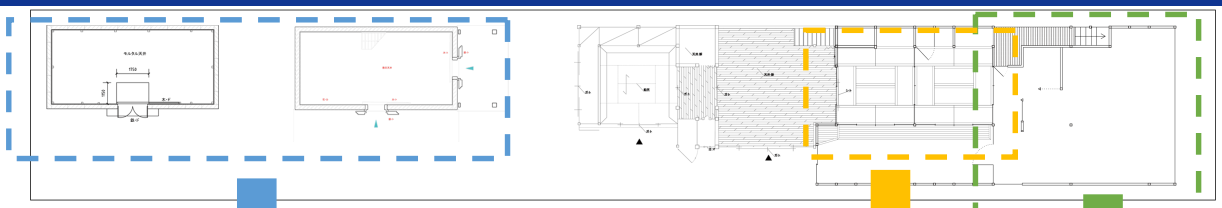
周辺1.5キロ圏内



細谷邸 現状

- 昭和4年頃の建築
- 油屋/和菓子屋の履歴
- 前面のみ2階
- 背後に2棟の石蔵(大谷石)

細谷邸 現状



細谷邸配置図

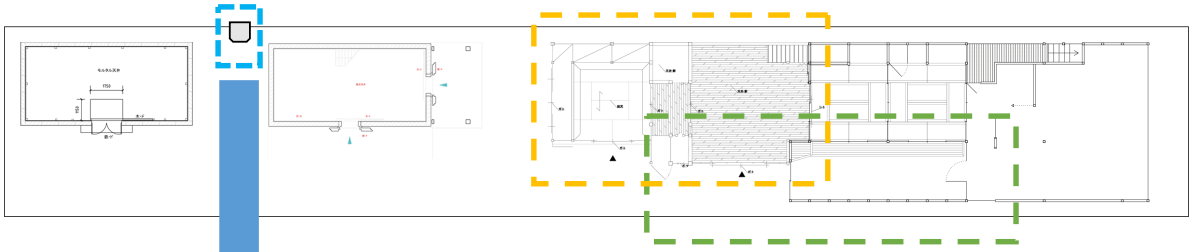
石蔵

8畳2室の
和室部分

1階　ミセ

2階　和室

細谷邸 現状



細谷邸配置図

屋敷神

増築

レール

青柳家倉庫　現状

住所：石岡市府中3丁目-9-4
※中心市街地区

青柳家倉庫　敷地の環境

・東側は三車線の国分町通り、西側は二車線
・道路両側に歴史的建築物が存在

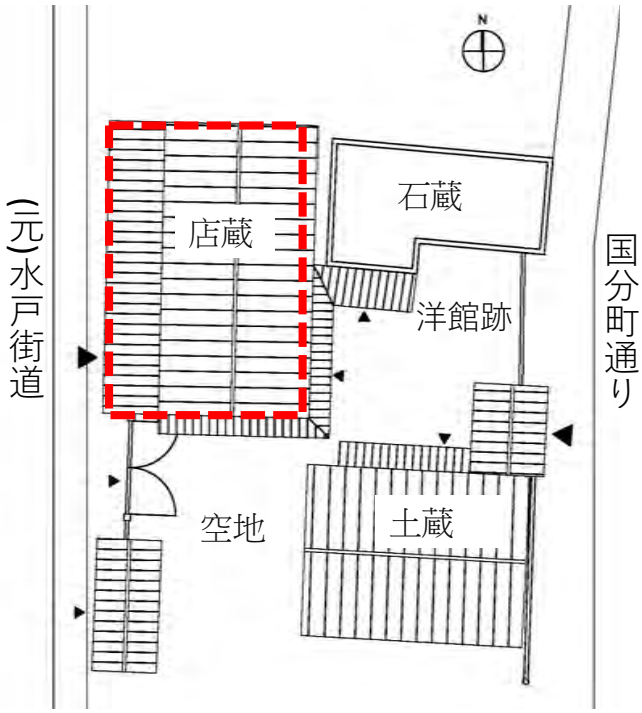
青柳家倉庫　現状の敷地利用

青柳家倉庫　店蔵

大正4年9月に建設され、上下2階建て

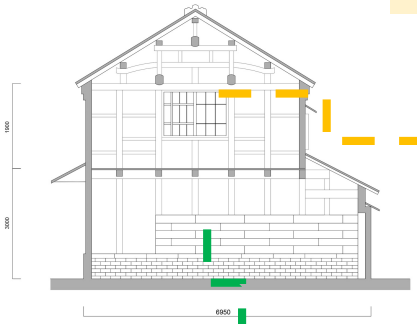
店蔵正面

二階から

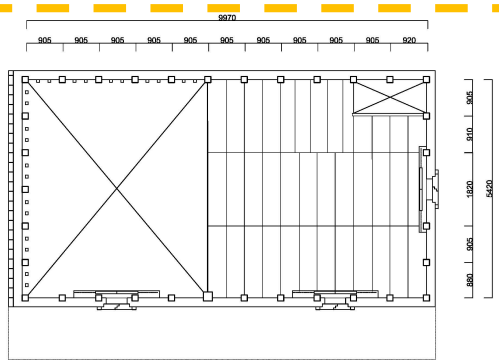


青柳家倉庫　店蔵

断面図

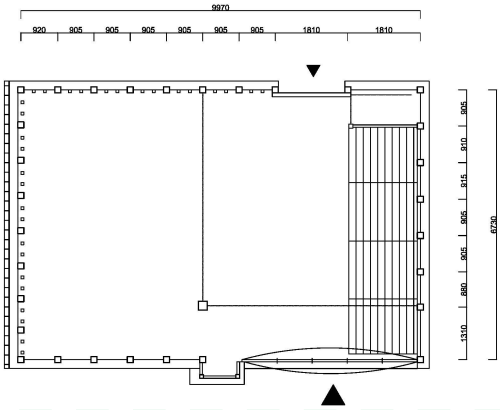


2階



床は1Fの50%

1階

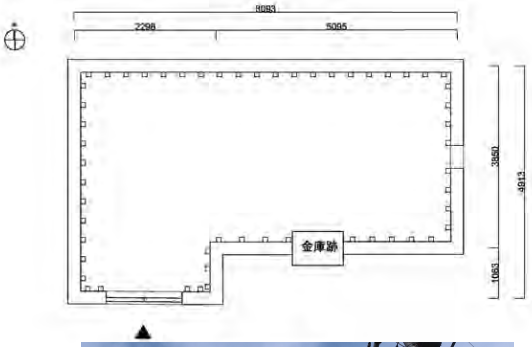


半間ごとに柱
柱の間に木板

青柳家倉庫　石蔵、土蔵

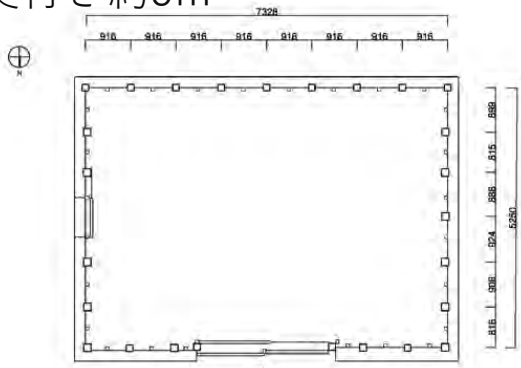
石蔵

- 金庫の跡
- 外壁に柱梁の跡



土蔵

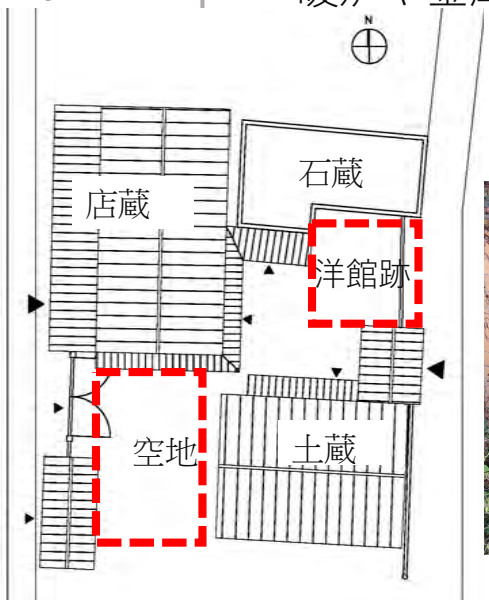
明治25年に再建。間口約7.4m、奥行き約5m



青柳家倉庫　洋館跡・空地

空地

- 店蔵の南、土蔵の西
- 植物が放置されている
- 西側の通りに門でつながる

洋館跡

- 石蔵と土蔵の間
- 植物で覆われている
- 暖炉や金庫の跡がる